

(cyclophosphamide 150mg p. o day1-14, MTX 20mg/sq i. v. day1, 8, 5FU 500mg/sq d. i. v. day1, 8 TPA 600mg) で、比較的効果をえられ、患者の quality of life に貢献できそうな症例が有るので1例報告する。

#### 47. 乳癌保存術後の根治的放射線治療の経験

服部英行 (東京女子医科大)

東京女子医科大学放射線科では、1969年10月から1988年5月までに手術拒否および手術不能例の乳癌に対して乳房保存術後の根治的放射線治療を19例に行った。今回はその内、早期乳癌10例について報告した。放射線治療は全例胸壁に対し切線照射が行なわれ、線量は32~62 Gy, 平均47.7Gyであった。また10例中7例は乳房または腫瘍床に電子線を追加し、総線量は40~71 Gy 平均58.8Gyであった。リンパ節領域の照射は腫瘍の大きさ、占拠部位、リンパ節転移等により各症例で個別化した。治療後の予後は7カ月から12年までで、生存期間の中央値は3年4カ月であった。現在まで10例中3例が死亡しているが、2例は遠隔転移、1例は子宮頸癌が死因であり、局所再発は認められなかった。

#### 48. 乳癌放射治療成績

此枝絃一 (川口市民)

国立病院医療センターでは、免疫学的効果が期待できる電子線を用いた小分割大線量照射法による術前照射を乳癌に対して昭和51年6月から行っている。この術前照射と他の治療法との生存率の比較を検討した。昭和48年7月から昭和58年12月までに国立病院医療センターで手術を行った乳癌症例は286例あり、放射線治療単独例が2例あった。治療法別生存率に統計学的有意差はみられなかったが術前照射症例には放射線治療前は手術不能例が含まれており同一病期であっても、よりすすんだ症例が含まれていることを考えるとその効果はあったと考えられる。術前照射症例では Stage IIIa, IIIb にて Abscopal effect がみられた症例の方が生存率が高かった。

#### 49. 子宮頸癌の放射線治療における S 状結腸障害の起因について

奥畑好孝 (千大)

帝京大学医学部附属病院においてⅡ期・Ⅲ期子宮頸癌で標準的根治放射線治療を施行した42例のうち、S状結腸障害を発生した4例と非障害例を腔内照射線源の位置、推定最大被曝線量、肥満度、その他について比較検討した。線源位置の推定および被曝線量の算出にあつ

ては、外部照射野および腔内線源位置の確認のX線写真より骨盤仰角を補正し、外部照射時の中央遮蔽と腔内線源の位置関係を合成した。その結果、線源の位置が中央遮蔽内に含まれる場合、障害は発生しておらず、障害発生例ではいずれも中央遮蔽周囲の推定被曝線量が6250 cGy 以上であった。また6250cGy 以上でも肥満度が20%以上の例では障害は発生していなかった。これより、S状結腸障害の起因については中央遮蔽外に出た腔内線源の位置関係が重要であり、それに加えて肥満度等の因子が関与すると思われる。

#### 51. 放射線照射後のサイトメガロウイルス感染マウスに対するインターフェロン誘発剤の効果

斉藤正好 (千大・放技校)

三好武美 (千大)

橋爪 壮 (看護学部)

4.5Gy 放射線全身照射マウスにインターフェロン (IFN) の誘発剤である Poly ICLC (0.2mg/kg) を投与し、放射線障害と IFN 誘発量、NK 活性およびサイトメガロウイルス感染に対する効果について検討を加えた。1) 全身照射により白血球数が10%に減少した状態においても IFN の十分な誘発が認められた。2) 照射により低下した NK 活性を著明に上昇させた。3) 照射後のサイトメガロウイルスの感染において POLYICLC の投与は、臓器内 (特に脾臓) のウイルスの増殖を抑制し、感染前の予防的投与の有効性が示唆された。

#### 52. 胸壁浸潤型肺癌に対する温熱併用放射線療法

幡野和男

(国立病院医療センター放射線治療部)

2例の胸壁浸潤型肺癌に対して温熱併用放射線療法を行なったので、肺癌の温熱療法および温度計測上の問題点について報告する。

放射線治療は50~60Gy, 2 Gy/Frac, 温熱療法は週1~2回、放射線治療直後に42°C 以上60分とした。加温装置は8 MHz, 誘電加温装置であるサーモトロン RF8 を用い、X線 CT ガイドで温度センサーを腫瘍内に留置し温度計測を行なった。2例共に画像上は PR であったが、1例は組織学的には CR であった。椎体前面および皮膚の浅い部位は温度上昇が不十分であり、根治治療を目的とする際には注意を要する。また正常肺は最高41°C 程度にとどまり特に問題は生じなかった。肺癌に対する温熱併用放射線療法は有効であると考えられ、今後症例を重ねて検討する必要があると思われる。